

膨張性であることを反映していると考えられ、予後の期待出来る胆嚢癌の画像上の特徴と考えられた。

13) 産科領域の MRI の検討

林 浩子・西原眞美子	(新潟大学放射線科)
酒井 邦夫	(新潟大学放射線科)
前田 春男・黒川 茂樹	(新潟市民病院)
横山 道夫	(新潟市民病院)
三浦 恵子	(長岡赤十字病院)
	(放射線科)
吉沢 浩志	(新潟大学産婦人科)
徳永 昭輝	(新潟市民病院)
	(産婦人科)

〈対象と方法〉妊婦21例に MRI を施行し、その有用性を検討した。内訳は着床異常2例、胎児奇形5例、母体合併症妊娠10例、骨盤計測4例である。〈結果〉施行例中18例(86%)で良好な画像が得れ、内診やエコーをしのぐ情報が得られた。MRI はエコーにつぐ第2の検査法と考えられた。胎動による画像劣化が問題となる妊娠中期以降例においても鎮静剤母体投与により胎動の制御に成功し、全例鮮明な画像が得られた。

14) 超音波と MRI で出生前診断された腹壁破裂の1例

松月 由子・佐藤 敏輝	(厚生連中央総合)
原 敬治	(病院放射線科)
梅津 尚男	(鶴岡市立荘内病院)
	(放射線科)

腹壁破裂と臍帯ヘルニアは出生直後に緊急手術を必要とするので、出生前診断が重要となります。また、それぞれの合併奇形と予後が異なるので両者の鑑別も必要です。

文献的には、ルーチンの超音波検査における前腹壁欠損の検出率は67.6%、false positive rate は5.3%であり、accurate categorization は83.6%です。超音波技術の進歩によりこれらの成績には格段の向上をみとめますが、若干の改善の余地は残されています。

MRI は腹壁破裂の症例において、胎児および脱出内容の全体像がとらえやすく、腹壁欠損部と臍帯基部の描出が良好です。超音波で評価が困難な症例に対して MRI を施行することは、false positive の減少と正確な categorization に関して有用であると思われます。

15) 仙尾部奇形腫の5例

三浦 恵子・木原 好則	(長岡赤十字病院)
清野 泰之	(放射線科)
広田 雅行	(同 小児外科)

新生児乳児のまれな腫瘍である仙尾部奇形腫の手術例5例について検討した。全例女児だった。Altman 分類では、I型が3例、II型が1例、IV型が1例だった。診断時期はIV型の1例を除き、すべて出生時に診断されている。IV型の症例は、生後6か月に尿道圧迫による膀胱拡張で発症した。腫瘍は、比較的境界明瞭で、充実性と嚢胞性との混在したものが2例、嚢胞性のものが3例だった。脊椎管内に連続しているものは無かった。全例が良性奇形腫で、経過良好である。

仙骨前型や亜鈴型は手術操作が複雑になるし悪性化の頻度も高くなるが、術前の腫瘍の進展範囲の評価において、MRI および Direct sagittal CT は有用であった。

第75回新潟臨床放射線学会

日 時	平成5年12月11日(土)
	午後2時より
会 場	新潟大学医学部
	第一講義室

一 般 演 題

1) Microsphere model を用いた ^{123}I -IMP による局所脳血流測定法

—全脳カウント補正法・短時間 SPECT 補正法による検討—

高橋 直也・小田野行男	(新潟大学放射線科)
酒井 邦夫	(新潟大学医療技術)
大久保真樹	(短期大学部)
大滝 広雄・野口 栄吉	(新潟大学附属病院)
山崎 芳裕・羽田野政義	(放射線部)

中枢神経疾患17例に対し、 ^{123}I -IMP と microsphere model を用いて局所脳血流量(rCBF)を求めた。静注後5分間の持続採血動脈血を入力関数とした。 ^{123}I -IMP の静注5分、20分、60分後の1分間の短時間 SPECT と頭部放射能カウント測定を行った。平衡時の SPECT は25分後から30分間かけて撮像した。静注5分後の SPECT から求めた rCBF と比較して、平衡時の SPECT を頭部放射能で補正した rCBF (rCBFCT) はよい相関